The Japan Society of Educational Sociology

第２部会

教育社会学史研究の視点をめぐって

東京大学教育系大学院　久富善之

（要　旨）

教育社会学史の課題と方法について、独自に取り上げて論究したものはほとんどないが、その例外である『教育社会学辞典』の馬場四郎の小論「教育社会学史の目的と方法」（項目「教育社会学史」、辞典Ｐ２２８）を出発点としよう。この８００字足らずの簡潔な文章の中で、馬場は、次のことを教えている。

まず、教育社会学史は「教育社会学論の付帯的部分を構成する」ということ、つまり「教育社会学の学問的性格の推移・発展を学問論の立場から歴史的に自己反省する」という方向を持って、学史研究は狭義の学論と相互関連しつつ、広義の学論の部分を構成しなければならないということ。と同時に、学史は「実質的な研究成果の整理・蓄積」によって学の「理論化・体系化」に寄与するという方向をも持たねばならないこと、そしてこの二つの方向は「そのいずれか一方に偏するのでなく、両者を関連させた歴史的考察を加える必要がある」こと、等を教えている。」

学史が「学論の付帯的部分を構成する」という主張の、「学史は概説の一部として記述されればよい」と言ったニュアンスに対しては、学史は特殊に研究するに値する領域である、ということを鮮明化させねばならないが、今重要なのはこの主張の別の側面、つまり学論と学史との相互関連認識である。つまり、学論を深めるには、学の歴史的自己反省が必要であり、であるが故にまた自己反省としての学史は、学論の現代的課題意識に基いて行われなければない、ということである。

その観点から馬場の主張を見ると、彼は教育社会学の歴史的展開過程を、「学問的主体性を具え、経験科学としての固有の体系を整備し、教育研究に対する基礎科学の地位を確立するに至る」とか「教育政策や教育実践に対しても現実的に寄与することができる体系を整備するに至る」そういう過程として明らかにすることを学史の課題としている。歴史的展開過程は、ここでは「主体的で固有な体系化」と、それにもとづく「政策・実践のための基礎科学としての確立化」という展開方向を持ったものとして前提されている。馬場の年来の主張が、「学としての独自の体系化」と「政策科学への発展」であったことを考え合せると、ここでは学論における彼の課題意識が、学史研究の課題意識にもなっていることがわかる。

このようなあり方の弱点は、「現代の教育社会学は、こういう方向に発展すべきである」と

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

いう課題意識が、そのまま学史研究に持込まれ、「あるべき」教育社会学の発展方向と、「現に存在した」教育社会学の展開方向とが二重写しにされてしまうこと、それがまた二重写しにあてはまらないものを学史から切り捨てる危険性にもつながること、である。

ここで大事なことは、学論をめぐる現代的問題状況を、「歴史的に存在し、現に存在する教育社会学の学問性格が、どういうものであったか、あるか」という問題と、「教育社会学が今後どういう方向へ発展すべきか」という問題とは、一応相対的に区別し得るものとして捉えることである。しかる後に、今後の発展方向の問題が、教育社会学のどのような歴史と現実の背景（ないし規定性）を踏まえてあるのか、という学論をめぐる問題状況の総合的把握をしてこそ、学史研究を成立させる「学論の現代的課題意識」は、はじめてトータルで客観的なものになり得るであろう。

例えば、馬場は教育社会学の成立について、「教育の事実および問題についての社会学的思考の発生」と言っている。しかし、教育についての「社会学的思考」とはいったい何なのかがより課題的に問われなければならない。それは「社会学の方法が単に偶然的に教育事実・問題に適用されたもの」なのかそれとも「一つの社会認識（＝社会学理論）が一つの教育認識（＝教育社会学）を必然のものとして、その理論展開の中に含んだもの」なのか。「社会学的思考の発生をめぐるこの問題は、sociology of education という呼称の大勢化の中でも、それを「社会学の方法の教育への単なる適用」と解してよいかどうかという課題、あるいは社会学に対する教育社会学の独自性はどこにあるのかという課題等の現代的問題状況と密接に関連して存在する。（これは一例だが）そうであるが故にまた、教育社会学史は課題的特殊研究の対象領域として、我々の尽きぬ興味を惹きつけてやまないのである。

（もくじ）

1. 教育社会学史研究の基本視点
2. これ迄の学史研究の成果と教訓
   (1) 記述から課題的特殊研究へ
   (2) 記述から批判的継承へ
3. 教育社会学史研究の現代的課題（注）
   (1) sociology of education呼称をめぐって
   (2) 教育の社会性の認識をめぐって
      ㋑ 教育＝労働力形成
      ㋺ 教育の階級性
      ㋩ 教育＝社会化
   (3) 理論と実践の問題をめぐって
      ㋑ 教育学との関連
      ㋺ 政策科学

（註） このような課題をここに列挙したのは、これを学論として論議してここで決着をつけたりするためではなく、これらの問題をめぐって現に出されている諸論議をふまえつつその問題の性格を明らかにし、そのことが、学史研究にどのような課題を提起しているかをさぐるためである。

4. 課題の具体化と今後の方向について

NII-Electronic Library Service